

作者のことば

小説やSFなどを読むのはもともと好きだったが、書く方の経験は実務的な文章くらい。それが昨年、新聞でふくふく童話大賞のことを知り、「力試しに」と人生で初めて挑戦した。

とはいっても、数枚の原稿用紙を埋めるのもやっと。過去の受賞作を読んでも、とても自分では無理とあきらめるほどレベルが高く、まさか自分が2作目で受賞できるとは思ってもなかった。家族ともども驚いている。

今回の作品の主人公は小学生。子どもと関わる仕事をしてきたわけでもないのに、自分が同じ年齢のころに考えたり夢見たりしていたことを素材にした。ジュースの川やカレーの沼がそう。がちまやー(食いしん坊)だったから、たぶんそんなことばかり空想していたのだろう。

作中では、亡くなった父親が子どもの絵や工作を「宝物」として大切にしていた描写が出てくる。

実はわが家でも、子どもたちが保育園の時に描いた絵をしまっている。子どもたちが絵を持ち帰ってきた時の幸

親子の愛情を表現



大賞受賞の喜びを語る山川直壮さん―北谷町の自宅

妻の助言 受賞に結びつく

せな感覚を思い出しながら書いた。親が子を思う気持ちや、子が親を思う気持ちが表現できているとすれば、娘や息子たちとのかかわりが反映されているのかもしれない。受賞が決まった日はちょうど末の娘の誕生日であり、いい記念になった。

前はすぐにアイデアが浮かんだのに、今回はなかなかひらめかない。書き始めたのは7月に入ってからだった。

3、4日でおおまかな形はできあがったが、推敲が大変。妻に読んでもらったところ、「子どもの会話としては不自然」「説明がくどくて面白みに欠ける」などと次々に注文が付いて修正した。結果的には、第三者の目を通したのがよかったのか。半分は妻が取らせてくれた賞だと感謝している。

ふくふく童話大賞は今回で休止になるそうだが、今後は大人向けの作品も手掛けてみたい。